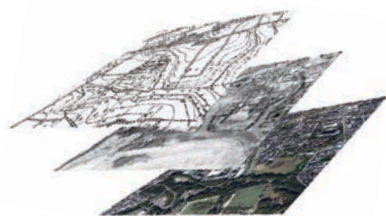


地図と空中写真で見る 「駒澤村」の100年前と現在



文学部地理学科 教授 田中 靖

本学の前身である曹洞宗大学が、麻布区北日ヶ窪町（現在の港区六本木6丁目、テレビ朝日本社ビルあたり）から、現在の地である東京府荏原郡駒澤村に移転したのは1913（大正2）年のことである。1925（大正14）年に駒澤大学と改称するまでの12年間は、駒澤村の曹洞宗大学であった。

駒澤大学周辺の移転前の様子を見るために、103年前となる1910（明治43）年発行の地図を示す（図1）。現在の記念講堂・1号館から8号館に相当する場所には「郷養鶏場」と記載されている。「郷」とは、この地で養鶏場を営んでいた地主の名前である。

駒澤大学の校地は、北・東・南の三方を深さ5mほどの谷に囲まれた標高約40mの台地の縁にあたる。移転当時この地域には、台地上に畑、台地を刻む呑川（のみかわ）の支谷沿いに水田が広がるという、関東地域の典型的な農村景観が広がっていた。また台地上には、屋敷林に囲まれた農家が点在していた。

大学移転の翌年1914（大正7）年から、大学の南に隣接する土地では東京ゴルフクラブによりゴルフ場の造成が始まった。1936（昭和11）年の空中写真（図2）を見ると、このゴルフコースが写っている。また大学内を見れば、今も変わらない耕雲館（現在の禅文化歴史博物館）の特徴的な屋根の形を確認できる。この写真が撮影された頃の駒澤は、町制が施行されて駒澤町となり、1923（大正12）年の関東大震災以降顕著となった東京の郊外化の波を受けて、都市化が急速に進んだ時期である。しかしこの頃はまだ、谷沿いの水田だった所に建物は建っておらず、開発は大山街道（現在の国道246号）沿いと台地上の土地条件の良いところに限られていた。

現在、大学周辺は駒沢公園を除き建物で埋め尽くされている（図3）。東京都区部の他の住宅地同様、この地域でも再開発等による建物の大型化・高層化、低層住宅地域の建物の老朽化、人口構成の高齢化が急ピッチで進んでいる。



図1. 大日本帝國陸地測量部1910（明治43）年発行1万分の1地形図「碑文谷」の一部。中央部の横書きで右から「郷養鶏場」の記載があるとところが現在の駒澤大学。



図2. 1936（昭和11）年旧陸軍撮影空中写真（B1-24）の一部。現在の駒沢公園の場所にあったゴルフコースや、現在も残る耕雲館の屋根が見える。呑川の支谷沿いには、この頃はまだ建物はない。



図3. Google Mapによる地図と衛星画像の合成地図（2013（平成25）年取得）。国土地理院による大縮尺の紙地図の更新は中止され、地図は電子データで配布、コンピュータで見えるものとなった。

今年は、本学が駒沢の地に移転して100年です。『駒沢移転100年特集②』は、次号309号（10月15日発行）に掲載いたします。また、11月2日（土）・3日（日）に開催する「オータムフェスティバル」で記念イベントを同時開催します。参加募集のお知らせは本誌の14ページをご覧ください。